

キッズスクール

校長 山田浩之

私が子どもの頃は、学校から帰ると決まって、アパートとアパートの間の空地へ行ききました。私たちは、パッチ（メンコのことをこう呼んでいました）をしたり、カン蹴りをしたり、野球をしたりしていました。時々、紙芝居屋さんに来て紙芝居を見ることもありました。私は、お菓子を買うお金をもっていなかったのでもいつも後ろの方で見っていました。

新潟小学校PTAと新潟市教育委員会が、水曜日と土曜日にキッズスクールのボランティアを実施しています。保護者や地域のボランティアの協力の下、水曜日にキッズスクールをのぞいてみました。その日は、全部で一四四人が、遊んでいました。グラウンドや体育館では、野球やサッカー、ドッジボール、フライングなど。ピロテーターでは、一輪車やうんていなど。四階多目的ホールでは、卓球。図工室では、勉強したり、工作したり、オセロをしたりと、それぞれに好きな遊びを楽しんでいます。何人かの子どもに聞いてみると、どの子どももキッズスクールが楽しいと言います。

「休み時間と違って、長く遊べる」
「休み時間は使えない遊び道具がある」

たしかに、見たことのない遊び道具がたくさんあります。しかし、どれもシンプルな遊び道具ばかりです。ゲーム機もデジタル機器ありません。そして、多くの子どもが言っていたのは

「ほかの学年の人と遊べる」

でした。これは意外でした。学校では、教育活動に意図的に異学年の交流を組んでいるのですが、子どもは、元々学年の違う者同士で遊べるし、遊びたいと思っているということです。

次のような答えも多くありました。

「自由に好きなどころで遊べる」

こんなキッズスクールが実施できるのも、ボランティアスタッフの方々が見守り、お世話をしてくださるからです。ありがとうございます。

しかしながら、このスタッフの人数が減ってきて、見守る人が足りないため、子どもたちの遊ぶ場所を減らさなければならぬこともあるそうです。ベテランのスタッフさんが、しみじみと次のように話してくださいました。

自分がボランティアをし始めた頃、まだ、キッズスクールがスタートして間もないころだったと思います。私のところに寄ってきて、こんなふうにお話してくれた子どもがいたんです。「誰が、キッズスクールを考えて始めたのですか。こんなに楽しいこと。」このことを今でも思い出します。

その子どもは、きつと、アパートの間の空き地を発見した気持ちになったのです。どんなに、わくわくしたことでしょう。